HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	高齢者における地域を基盤とした人々とのつながり：概念の明確化と測定尺度の開発 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	菊地, 眞海
Citation	北海道大学. 博士(看護学) 甲第16042号
Issue Date	2024-06-28
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/92729
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Mami_Kikuchi_review.pdf (審査の要旨)

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

様式　９

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（看護学）　　氏名：菊　地　　眞　海

	主査　教授	結城　美智子
審査委員	副査　教授	池田　敦子
	副査　教授	鷲見　尚己

学位論文題名

高齢者における地域を基盤とした人々とのつながり：概念の明確化と測定尺度の開発

当審査は 2024 年 4 月 15 日実施の公開発表にて行われた。（出席者 16 名）

近年、高齢者の孤独・孤立の課題に向けた支援アプローチの一つとして、高齢者における人とのつながりに着目した研究が盛んに行われている。しかし、その多くはいくつかの限界を抱えている。第一に、高齢者の人とのつながりにおいて「地域」を考慮することの重要性が指摘されるなか、従来の定義では地域や地域の人々の存在が必ずしも考慮されていない点が挙げられる。高齢化や単独世帯の増加が進行する現代において、家族などの身近な者のみを前提としない周縁関係にあたる「地域を基盤とした人々とのつながり」の重要性はさらに拡大することが予測され、明確なエビデンスのもとに孤独・孤立予防に向けた地域保健活動を展開するための新たな概念を整理することが求められる。第二に、高齢者の人とのつながりにおいて、「主観的評価」を考慮することが重要であるが、従来の測定方法では十分な把握には至っていない点が挙げられる。既存の測定指標は、ネットワーク規模を定量的に測定する客観的評価を目的としており、高齢者の特性を考慮し特別に設計した主観的評価指標の開発は未開拓の分野で、今後の発展が待たれている状況にある。

本論文は、このような現況にある高齢者における地域を基盤としたつながりについて、はじめに地域ケア専門職の本概念の定義に対する理解と共有を目的として、地域を基盤とした人々とのつながりの概念を明確化した。続いて、本概念の明確化された定義に基づき、公衆衛生看護などの実践現場での運用を目的として、高齢者自身が捉える主観的な地域を基盤とした人々とのつながりの認識を包括的に測定する、「高齢者の地域を基盤とした人々とのつながり観尺度」を開発した。本論文は、古典的テスト理論を用いて、高齢者における地域を基盤としたつながりに関して段階的に研究し、看護学上の有益な孤独・孤立予防対策への示唆を得ることを目的としたものである。

本学位論文は、4 章から構成されている。第 1 章では、Walker and Avant の概念分析アプローチを用いて、高齢者における地域を基盤とした人々とのつながりの概念を現代的文脈から明らかにした。その結果、現代的文脈における新たな定義が示された。高齢者の地域を基盤とした人々とのつながりとは、「交流により生じる地域への帰属感や相互関係により生じる一体感の認識」であった。また、属性、先行要因、帰結がそれぞれ説明され、それらが結びつけられた。高齢者の地域を基盤とした人々とのつながりは、交流に至る心身状態を含む個別の性質、および、受け入れられている実感がもてる環境により生じた。そして、健康的な心身と自立生活の維持、困難を乗り越える力の獲得、共生に伴う人生の意味づけをもたらすものであると結論付けられた。明確化された本概念は、高齢者の身体的・心理社会的健康を含む包括的な健康に関連する概念であることが示唆された。

第 2 章および第 3 章では、第 1 章を踏まえ、高齢者自身が捉える主観的な地域を基盤とした人々とのつながりの認識を測定する、高齢者の地域を基盤とした人々とのつながり観尺度の開発を行った。第 2 章では、尺度試案の構築を目的としたパイロットスタディを行った。(1)　項目レビュー、(2) プレテスト、(3) フィールド検証の 3 フェーズにより尺度

試案を構築し、その信頼性および妥当性を評価した。フェーズ（1）では、第 1 章とキーインフォーマントインタビューの結果をもとに、アイテムプールを作成した。そして、内容妥当性を確認するために、保健師 9 名、研究者 9 名の計 18 名による専門家チェックを行った。フェーズ（2）では、フェーズ（1）で洗練した項目について表面妥当性を確認するために、地域在住高齢者 36 名によるプレテストを行った。フェーズ（3）では、フェーズ（2）でさらに洗練した項目について北海道旭川市に居住する高齢者 800 名を対象にフィールド検証を行った。妥当性は、因子的妥当性および併存的妥当性により評価した。併存的尺度には、生きがい意識尺度、孤独感尺度を選択した。信頼性は Chronbach’s α係数の算出により内的一貫性を確認した。その結果、フェーズ（1）および（2）より、内容妥当性と表面妥当性が確保された 30 項目が確認された。さらにフェーズ（3）より、信頼性と妥当性が確認された 22 項目の尺度試案が構築された。因子的妥当性は、探索的因子分析において「包摂性の認識」、「供与による互恵性の認識」、「受容による互恵性の認識」の 3 因子 22 項目からなる概念構造が明らかになった。併存的妥当性は、尺度総得点において生きがい意識と正、孤独感と負の、いずれも有意な相関が確認された。因子的妥当性および併存的妥当性の観点から、本尺度試案の妥当性が示された。さらに、内的一貫性は Chronbach’s α係数が尺度全体で.967 であり、すべての下位尺度とともに.900 以上を示したことから、本尺度試案の信頼性が示された。第 2 章において信頼性と妥当性を有する尺度試案が構築された。

第 3 章では、第 2 章を踏まえ、高齢者の地域を基盤とした人々とのつながり観尺度の試案について、未検証となっている安定性による信頼性および確認的因子分析による妥当性を確認し、汎用性のある尺度を確立した。対象は北海道札幌市に居住する高齢者 1000 名とした。妥当性は、因子的妥当性および併存的妥当性を評価した。併存的尺度には、生きがい意識尺度、孤独感尺度を選択した。信頼性は Chronbach’s α係数の算出により内的一貫性を確認した。さらにテストー再テスト法を採用し、級内相関係数（ICC）の算出により安定性を評価した。その結果、因子的妥当性は、確認的因子分析において良好なモデル適合度が確認された。併存的妥当性は、尺度総得点において生きがい意識と正、孤独感と負の、いずれも有意な相関が確認された。因子的妥当性および併存的妥当性の観点から、本尺度の妥当性が示された。さらに、内的一貫性は、Chronbach’s α係数が尺度全体で.967 であり、すべての下位尺度とともに.900 以上を示した。安定性は、テストー再テスト法により確認し、総得点の ICC は 0.875 であり、すべての下位尺度とともに.700 以上を示した。内的一貫性および安定性の観点から、本尺度の信頼性が示された。第 3 章において十分な信頼性と妥当性を有する尺度が確立した。

これを要するに、著者は、地域ケア専門職が展開する地域在住高齢者の孤独・孤立予防に対して、人とのつながりを考慮した地域づくりを具現化する概念及び尺度を構築することで新たな知見を得たものであり、看護学および地域保健活動の発展に貢献に資するところ大なるものがある。

よって著者は、北海道大学博士（看護学）の学位を授与される資格あるものと認める。